



南ぬ風

一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌

Vol.33
2014.10~12
秋号



ワクワク工作室

身近な素材を使ったクラフトや工作、昔ながらの手作りおもちゃなどを紹介します。

※葉はすべて取り除き、穂の穎果(読み:えいか/種の部分)を落とす。柄を長くしたい場合は、竹に縛り付ける方法もある。いろいろな形や大きさのほうきを作ってみよう。



ススキのほうき

- 材料**
- ① ススキの穂(長さ約50cmを10本程度)
 - ② 紙紐(麻やビニールでも可)
 - ③ ハサミ・カッター

作り方



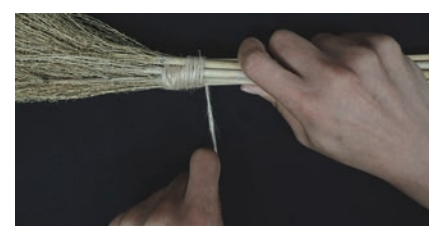
① 穂を数本束ねて固結びする。



② 穂を数本足す。この時、穂先が同じ方向を向くように揃える。



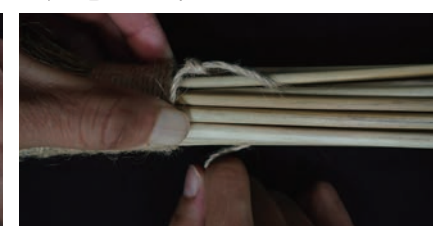
③ 最初に束ねた穂と足した分を合わせた状態で紐を巻きつける。



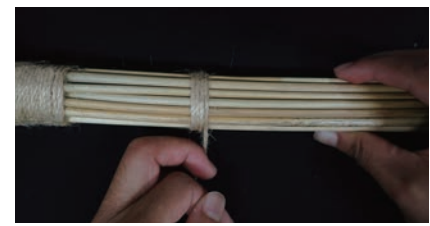
④ 更に穂を数本足して、紐を巻きつける。



⑤ 数回に分けて穂を足し、好みの太さになるまで繰り返す。



⑥ 好みの太さになったら紐に結び目を作り、柄の間を通した後、固結びをする。余った紐は切り落とす。



⑦ ⑥の結び目から5cmほど離して柄を縛る。



⑧ 適当な長さのところで、縛る。



⑨ 柄の末を縛り、環をつくる。最後に余った柄を切り揃える。

沖縄美ら島財団の工作教室に参加してみませんか？

当財団では主にお子様を対象として「美ら島・美ら海こども工作室」や「クラフト作り」等を開催しています。参加ご希望の方は下記ホームページでイベント情報をチェックしてみてください。

美ら島研究センター
<http://okichura.jp/ocrc/event/kousakushitu/>

沖縄県立 名護青少年の家
<http://www.opnyc.jp/>

海洋博公園
<http://oki-park.jp/kaiyohaku/>

一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌
季刊誌 **南ぬ風** 秋号 vol.33
2014.10~12

編集・発行 / 一般財団法人 沖縄美ら島財団
Okinawa Churashima Foundation
〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888 TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900
2014年10月発行

一般財団法人 沖縄美ら島財団公式サイト《 <http://okichura.jp/> 》 国営沖縄記念公園公式サイト《 <http://oki-park.jp/> 》



歴史家

上里隆史

UEZATO TAKASHI



琉球史を一般の人にわかりやすく伝える新進気鋭の歴史家

首里城復元やNHK大河ドラマ『琉球の風』、『肝高の阿麻利』をはじめとする現代版組踊、ベストセラー小説『テンペスト』などの影響もあり、最近では『琉球』という存在が身近なものとなりつつある。その中でも、「難しい」というイメージの強かった琉球史研究をわかりやすく解説した『目からウロコの琉球・沖縄史』は県内外で話題となり、続編も次々と出版された。その『目からウロコ』シリーズの著者である上里さんに、話を聞いた。

1976年生まれ。琉球大学法文学部(琉球史専攻)卒業。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。現在、早稲田大学琉球・沖縄研究所招聘研究員。第13回窪徳忠琉中関係研究奨励賞受賞。NHKドラマ『テンペスト』時代考証。主な著書に『目からウロコ』の琉球・沖縄史』『ポーダーインク』のシリーズ、『琉日戦争一六〇九 島津氏の琉球侵攻』『ポーダーインク』、『たくさんのふしぎ琉球』という国があった『福音館書店』ほか。

研究の成果から、昔の人の生きた姿が見えると面白い。

—上里さんが琉球史に興味を持ったキッカケは何ですか？

実は小・中・高と首里にどっぷり浸かって育ったんです。首里城が復元・整備されていく過程を多感な時期にリアルタイムで見えたことが大きかったと思います。小学校4年生の時にちょうど正殿跡の発掘調査がされていて、一般市民も参加できるとテレビが何かで知り、放課後、出入口のガードマンさんに「発掘調査に参加させてください」とアポなしでお願いしたりして。今考えたら当然ですが、「保護者がいないと無理です」と断られて悔しかった記憶があります(笑)。

高校の時には、NHKの大河ドラマ『琉球の風』が放映されました。首里でもロケしていましたね。大学では高良倉吉先生のもとで琉球史を学びました。ちょうど御内原の発掘調査をしていたので、もちろん参加。小4のリベンジを果たすことができました(笑)。

—首里城復元をリアルタイムで見ていたというのは強烈な印象だったでしょうね。

龍潭から首里城跡まで庭みたいなのでしたから(笑)、首里城公園が開園して、これだけ変わるというのは驚きでした。琉球史の認知度はここ20年で上がりました。今、琉球史が花を咲かせている、そのカタチが首里城公園なのだと思います。

—従来の歴史研究はどうしても王朝史がメインで、難しそうというイメージがありました。

王朝の権力史を中心とした研究は、基本的には王府の歴史書の史観をそのまま踏襲したものです。難しくするというイメージがあるのは、そのためかもしれません。でも想像以上に歴史は豊かなものです。『目からウロコ』シリーズでは、それをわかりやすく伝えたいと思いました。首里城に

関して言えば、現在の首里城は近世後半、1715年に再建された首里城をモデルに復元されましたが、古琉球の時代は板葺き屋根で、今の姿とは異なります。歴史はその場所に地層のように積み重なっていて、今、カタチとして見えるのはその断面なんです。



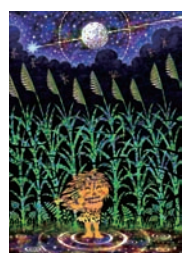
14世紀に繁栄が建てたとされる高世層理殿は長く伝説上のものとされていますが、近年の調査で首里城内の京の内エリアから古い礎石や瓦が出土したことから、高世層理殿が実在し可能性が指摘されています。

今後、御内原などの復元が進んで首里城公園が全面開園したあかつきには、そういう古琉球の姿なども含めて、見に来た人に伝えられるといいですね。

contents

美ら島をつなぐ人	02	御城物語	09
沖縄のこころ	04	運営管理	10
美ら島生き物日記	05	スポットライトの向こう側	12
調査研究	06	沖縄の大木	13
首里工芸品	07	財団いんふお	14
普及啓発	08	美ら島ワクワク工作室	裏表紙

作品タイトル「ウーヅが風になびく畑で笛を吹く少年。」ウーヅが風になびく畑で笛を吹く少年。その姿と音色と融合し、まるでウーヅがダンスをしているように見える。



表紙イラストについて
与儀 勝之 Masayuki Yogi
琉球イラストレーション作家 那覇市生まれ。

誌名「南ぬ風(ふえーぬかじ)」とは…
南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことで。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思っています。

—古琉球から沖縄の近現代史までつなぐる視点を来場者に提供するのは、リピーターの増加にもつながりますね。何回来ても新しい発見があるという仕掛けは、ちょっとした工夫でできることもありそうですね。

一回目は今の順路通りに回ってもらつて、リピーター向けに「古琉球コース」を紹介するパンフレットを作るとか。板葺き屋根の正殿の想像図なんかあるといいですね。下之御庭には唐当蔵という建物があったことや、京の内にあつたんじやないかと考えられている高世層理殿などを紹介する看板が何かあってもいいかもしれません。唐当蔵は冊封使をもてなす料理を作るキッチンでした。古琉球の時代は中国から来た料理人が料理していたので必要だった施設が、近世になって不要になったので老朽化して撤去されたんですよ。他にも、首里城のトイレはどこ？働いていた役人はランチに何を食べていた？など、我々が身近にイメージできるテーマがあれば、同じ場所でもまた違って見えてくる。そういうことを知らせる工夫や、ツアーなどがあれば面白いと思います。



さらに面白い歴史トリビアが掲載された新刊本『あやしい!目からウロコの琉球・沖縄史』。きちんとした研究をベースに、笑いのエッセンスを取り入れつつ、やさしく書かれた歴史エッセイ集。首里城に関する話題も数多く掲載されています。



上里さんも学生時代、発掘調査に参加したという御内原。基礎が発掘されたことが印象に残っているそう。正殿を壊さず、政治的な行事が行われた表舞台が御殿(ウナー)なら、こちらは女人だけが入れた生活。儀礼空間。現在は未開闢区域ですが、今後の復元・整備が待たれます。



美ら島 生き物日記

台風の攪拌効果

Vol.7



写真・文
白鳥岳朋 (しらとりたけとも)
東京生まれ、沖縄在住の水中&陸上 全天候型カメラマン。
1988年から水中撮影を開始。
主な著書・写真集に『おさかな接近術』(阪急コミュニケーションズ)、
『水中を撮る!』(雷鳥社)など。

上:台風の影響で大きくなる波とうねりは、島を囲むように発達したリーフを乗り越える勢いでそのパワーを叩きつける。右:仕留めた魚は口からエラへロープを通して数珠つなぎの状態にし、数がある程度まとまったら船に掲げる。



亜熱帯の沖縄では、10月から12月は温帯の「秋」のようにハッキリとした秋の雰囲気はない。唯一、台風が存在を除けば。

秋に多い台風は、風雨で海全体を大きくかき回す。結果、深場の冷たい海水を浅場へともたらすと言われる。

沖縄の高級魚であるアカジン(スジアラ)とマクブ(シロクラベラ)の成魚は、夏の頃には水深30メートル程度のやや深い場所にいることが多いようだ。それが秋になると、浅場で見かけるようになる。海の中の生物が、広い範囲で水深の深いところから浅いところに移動する要因を、台風の攪拌効果と考えれば興味深い。

そしてそれらの生態に敏感に反応するのは、海人だ。イノー(礁池)でも大きな魚介類が見られる秋から冬は伝統行事も多く、魚介類の需要も増える。この時期から年明けの旧正月頃までが、イノー漁のハイシーズンだ。リーフ内で根付きの魚を電灯の光で探し出し、一匹ずつモリ等で仕留める電灯漁のピークとなる。

地上では台風の被害に着目しがちだが、海は大きな水の塊が動いて活性化するという一面がある。そして、人はそんな自然に生かされている存在なのだ。

沖縄の

こころ

Vol.7

地域の伝統・文化を支える人たち



「シタニー」以外は、すべてウチナーグチで演じられる大和人行列

や え せ ちょう と もり ヤマトンチュ ジュネーイ

八重瀬町・富盛の大和人行列

旧暦八月十五夜は、沖縄県内各地で豊年祭や八月あしびなどの行事が行われ、五穀豊穡を願って綱引きや伝統芸能などが奉納される。各地にさまざまな芸能が伝わる中でも特にユニークなものの一つが、富盛の十五夜だけに伝わる大和人行列だ。富盛伝統芸能保存会の野原猛会長は言う。

「大和人行列と唐人行列は二つで、一対の芸能です。昔から富盛では集落を南と北に分けて、芸能や綱引きで競い合ってきた。大和人行列は南の、唐人行列は北の出し物なんです。今年、唐人が先で大和人が後だったら、来年は逆、というふうには、上演する順序は毎年交代しています」

大和人行列はウディイと呼ばれる先導役を先頭に、提灯持ちや代官、オージーメー、地方が続く。「シタニー、シタニー」というかけ声は本土の大名行列を彷彿とさせるが、手前を出した歩き方は独特。衣装には丸に十字の島津家の家紋が入っており、薩摩と関係があることは推定できるのだが…。

「富盛では300年前から伝わる芸能と言われていますが、古文書などの記録が残っていないために、由来がハッキリとはわからないんですよ。薩摩の



唐人行列。冒頭で歌われる「パーエーの歌」の歌詞は、中国語の音そのまま口承で伝わっている
※扇を持って踊る扇舞のこと。この行列の場合、踊りだけでなく扇舞の踊り手も指す。

人と何らかの交流があって、これは面白いと思った富盛の先人が出し物にしたんじゃないかと思いますが、推定の域を出ないんですよね」

大和人・唐人両行列とも1998(平成10)年に旧東風平町の無形文化財に指定された。唐と薩摩、両方と深い関係にあった琉球ならではの芸能であるとも言える。また、富盛では青年会の活動が活発で、こうした伝統芸能を受け継ごうとする後継者がしっかりと育っているのも頼もしい。

染織品の非破壊色材調査

琉球王国には、工芸王国と称されるほど、様々な美術工芸品があります。その発展の中心となっていたのは、首里城でした。中でも染織品は、琉球王国時代、日常的な使用のみならず、交易品としても使われていました。ここでは、染織品について実施している科学調査について紹介します。

現在残されている染織品は、どのような顔料・染料を使って染められたのか、これまでは文献資料や製作者からの聞き取り、目視判定などによって主に調査されてきました。

しかし、漆器などの研究分野で行われてきた、蛍光X線などの科学機器を使った理化学調査が、2001年から行われた国宝「琉球国王尚家関係資料」の調査を皮切りに、染織品についても行われるようになりました。

沖縄美ら島財団でも、平成22年度から財団所蔵の染織品について、理化学調査に取り組んでいます。この調査については、吉備国際大学の下山進教授、大下浩司准教授、そしてデンマテリアル色材科学研究所の下山裕子氏に協力いただき実施しています。

調査は、実物の染織品を破壊する事は出来ないため、非破壊調査でなければなりません。その中でどのような植物染料や鉱物顔料が使用されたのか調べるため、①低レベルの放射線を照射し、顔料固有の成分元素に由来するエネルギーを計測して、測定箇所の色相と検出元素から、顔料を特定する携帯型蛍光X線非破壊分析装置、②光ファイバーを通して波長の異なる光を照射し、照射した光の波長毎に放出される蛍光スペクトルを計測して、染料の分子構造に由来する固有の蛍光特性を指紋のようなパターン情報として捉え、染料を特定する三次元蛍光スペクトル非破壊分析装置、そして③光ファイバーを通して可視光線から近赤外線領域の光を照射し、その波長領域における分光反射率曲線(スペクトル)の形状から色材の特性を解析する可視・近赤外反射スペクトル非破壊分析装置等を使います。同じ黄色の色材であっても、そこに使われている材料が顔料なのか、染料なのか、何が使われているのかを判定します。

これまで調査を行った染織品の色材には、沖縄だけでなく、琉球国やウコン等の材料だけでなく、琉球国

外から輸入した鉱物顔料や植物染料が使われたことがわかりました。例えば、木綿黄色地鶴菖蒲桜楓文様紅型帯では、水銀元素が含まれている「朱」、ヒ素を主成分元素とする「石黄」、18世紀のドイツ(プロシア)で作られた鉄を主成分元素とする人工顔料の「プルシアンブルー(ペロ藍)」が使われ、その他に「蘇芳」等の植物染料も多く使われています。これらの材料の中には、現在の紅型や織物製作では使わなくなったものや、すでに入手困難な素材もあります。例えば、有毒なヒ素を含む石黄などは、現在は代用品が使用されています。

これらの調査結果から、これまで言い伝えられてきた染料・顔料が実際に使用されていたことが確認され、これまであまり言及されなかった黄色染料の「黄蘗」が琉球の染料として使用されていたこともわかりました。

本調査結果は、今後染織品の復元を行う際に活用する他、2014年7月4日～9月17日に首里城公園黄金御殿で実施した『琉球王国の美々織染』展の展示でも解説文等に活用しています。

(幸喜 淳)



調査風景



蛍光X線分析装置の検出器先端(左)および測色計(右)

首里工芸品 Vol.2

「黒漆雲龍螺鈿長方形東道盆」

「黒漆雲龍螺鈿長方形東道盆」は、黒漆に螺鈿で、瑞雲と龍が描かれた大型の東道盆である。製作年代は、18世紀から19世紀と考えられている。

東道盆とは、食物を盛る容器で、通常、中には小さな皿があり、容器の形は円形、方形が多い。しかし、この資料のような長方形の物は少ない。琉球独特の漆器で、琉球王国の官営工房であった貝摺奉行所が制作した物であることが絵図によって判明している。

現存する長方形の東道盆のうち、一つは国宝「尚家資料」、もう一つは中国北京故宫博物院にも、これと同じような東道盆が収蔵されている。

螺鈿で描かれた龍の爪は5本爪となっており、まさに中国皇帝に献上するための物である。蓋や身の正面・背面には、火焰宝珠を取り合う阿吽の一对の龍が画面いっぱいに描かれている。縁には、軍配や宝珠、卷子等の吉祥文が廻らされ、脚部にも唐草や細かい模様の薄貝が貼り付けられている。脚部の四隅には、獅子頭が付いている。皇帝のシンボルである龍を、貝の青や紫色の輝きを使い分け、力強くも繊細な表現を器物全体に施した、琉球王国時代の技術の高さがうかがえる作品となっている。(久場まゆみ)



もめんきいろしつるしょうぶざくらからえて
木綿黄色地鶴菖蒲桜楓文様紅型帯

調査によると黄色から石黄、赤色は朱、緑色は石黄とペロ藍、淡青色は藍、濃青色からペロ藍が検出された。



つむぎじ
紬黄地ムルドウッチリ
袷衣裳(琉装)

ムルドウッチリという縦横総緋の技法によって織られた織物で、調査によると本資料の黄色からウコンが検出されている。



きぬきいろじうめかえてゆきわ
絹黄色地梅桜雪輪
てまりもんよう
手鞠文様紅型袷衣裳

調査によると本資料の黄色からウコン、緑色は石黄とペロ藍、青色はペロ藍、赤紫から臙脂(えんじ)が検出され、黒色は墨と判定された。



きぬあざじ
絹浅地ロートン
織衣裳

ロートン織、道頓織りともいわれ、裏表とも縦糸が浮いて織られた織物。調査によると青色から藍が検出された。

視覚障害のある人も楽しめる水族館を目指して



沖縄美ら島財団では、生きた生物や標本など、実物を活用した普及啓発活動にも力を入れており、沖縄県内の福祉施設や病院、離島を対象とした沖縄美ら海水族館の移動水族館をはじめ、特別企画展の開催などを実施しています。

2011年からは視覚障害のある人も楽しめる水族館を目指し、「触察」というプログラムを実施しています。水族館では、水生生物の多くを水槽の中で展示しており、視覚的な展示が中心にならざるをえません。そこで、標本や生体を触って観察できるプログラム、触察プログラムを用意し、修学旅行で来館する視覚特別支援学校の生徒さんを中心に、館内外にて触って楽しむ水族館を提供しています。

触察プログラムでは、サメや魚の液浸標本、サメのアゴ骨や皮フの乾燥標本のほか、プラスチックネーション標本を教材として用います。プラスチックネーション標本とは、生物標本の組織内の水分や脂肪分

を合成樹脂に置き換えた標本で、内臓を取り除いた剥製とは大きく異なります。

当財団では、軟骨魚類、硬骨魚類、無脊椎動物などの触察用プラスチックネーション標本を約40体所蔵しています。これら様々なタイプの標本を組み合わせて用いることで、視覚障害のある人にも海の生物に親しんでもらえるようなプログラムを実施しています。

今後は、沖縄美ら海水族館ならではの標本に触れて学べる観察学習を、視覚障害のある方だけでなく、広く一般の皆様にも体験していただける場を提供していきたいと考えています。

(横山 季代子)

①コイの液浸標本:魚の外部形態について学びます。②アオザメ頭部のプラスチックネーション標本:サメの頭の大きさや歯の鋭さを体感してもらいます。③クロヘリメジロザメの仔ザメの液浸標本:サメの繁殖様式について学びます。



御城物語

Vol.6

かつて、首里の人々が「御城(うぐしき)と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。首里城とその周辺に関するトリビアを語る歴史エッセイ。

首里城の赤瓦

青空に映える首里城の赤瓦は、沖縄のイメージの一つと言えるのではないだろうか。

今から400〜500年前の首里城は、板葺き屋根でした。1660年に火事になり、再建した首里城は、瓦葺きになりました。しかし瓦の色は、発掘調査によると、赤ではなく灰色の瓦が出たそうです。赤瓦になったのは、再度火事で首里城が焼けた後、1715年に再建した首里城からです。なぜ灰色から赤瓦に変わったかと言うと、その頃の琉球で起こった人口増加問題にあったようです。

400年前の琉球の人口は約10万人。それから100年後、人口は20万人近くになったようです。今も昔も、生活に欠かせない火は、薪を燃料にしていたので、人が増えると薪が無くなります。灰色の瓦だと高い温度で焼かないといけません。赤瓦だと低い温度でも焼け

るので、薪を使う量を節約できるのです。

首里城の瓦を赤くして資材を節約した後、琉球王国では、山原に植林して、各村の山を管理し、守ろうとしました。当時の琉球の人々は、すでに自然の大切さに気付いていたのです。その証拠の一つが、首里城の赤瓦とも言えるのではないのでしょうか。瓦屋根は土族の家その他、陶器を焼く窯元、酒屋等の火を使う職業の家屋などに制限されていました。赤瓦は、省エネ対策のひとつだったと考えられます。

(久場まゆみ)



夏休みの首里城では 家族揃って楽しめる 体験教室が大好評。



無料区域内の系図座・用物座(けいずざ・ようもつざ)の中が特設会場となっている。

職員のアイデアから生まれた、 首里城らしいクラフト体験。

ファミリーでの来園者がぐっと増える夏休み。首里城では「夏休み体験まつり」と題して、沖縄の歴史・文化に基づいたクラフト体験教室を実施しています。無料で体験できるプログラムを首里杜館で、材料費程度の参加費で体験できる有料版プログラムを系図座・用物座の建物内で開催。系図座・用物座は琉球王朝時代、家系図などの重要書類や宮廷儀礼で使う用品を収納していた建物。外観復元のため、内部はこうしたイベントにも対応できる構造になっています。

まず、無料版は「首里城の色を学ぼう！ぬり絵体験」「ペーパークラフト 琉球の玉冠&お面作り体験」の2種類です。

「ペーパークラフトは2014年の今年で2年目、ぬり絵は今年のゴールデンウィークに初めて実施して好評だったので、夏休みで2回目の実施になります。それぞれ5000組用意しています」と話すのは、首里城公園管理部事業課業務広報企画係の菅間加奈子主事。

「ペーパークラフトは首里らしさを考えて玉冠、ミルク神、聞得大君の金かんざしの3つにしました。ミルク神のお面は、赤田町のミルクを参考に、パソコン上で作って、プリントして試作して…を繰り返して今のカタチになったんですよ」とは、実際にペーパークラフトを開発した首里城公園管理部事業課業務広報企画係の新垣智弥さん。観光客の多い首里城にあって、無料のペーパークラフトは地元の子どもたちにも好評で、学童クラブの子どもたちも団体で作りに来るとか。

「全体の4分の1ぐらいは地元の子どもたちという印象です。それに対して有料の体験イベントの参加者は、ほとんどが県外からの家族連れですね。県外からの観光客はレンタカーで移動されるお客様が多く、時間に余裕があるので気軽に参加されて行かれます。お子さま連れが多いんですが、実際に作業を始めると、大人のほうが一生懸命だったりして(笑)」と、菅間主事。首里城でクラフト



1:お手本と見比べながら、色を塗っていく親子連れ。 2:シーサーは女の子に、ドラゴンは小さい子に、龍柱は男の子や大人に人気がある。 3:色付け後はドライヤーで乾かす。 4:こちらは首里杜館情報展示室で開催された無料体験コーナー。 5:首里城正殿の他、向拝柱など歴史好きの大人も楽しめる内容。 6:左から聞得大君の金かんざし、琉球国王の玉冠、ミルク神のお面。聞得大君は髪の部分もかつら状になっているのがユニーク。



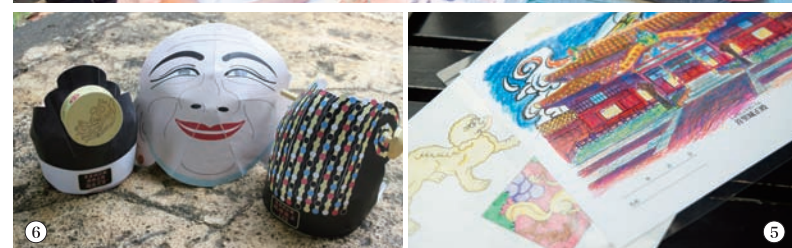
左が菅間加奈子主事、右が新垣智弥さん。クラフト体験の案内看板は、菅間主事がお客様に分かりやすいよう写真を入れてデザインした。(注:現在は、看板を置いていません。)



ミニ旗頭は、首里の伝統文化を身近に感じてもらうため考案された。漆喰で作られたシーサー、ドラゴン、龍柱は好きな色でオリジナル作品が作れる。いずれの体験も参加費500円。

体験教室を始めたのは4年前。1年目は首里らしいものをという趣旨で琉球張子の絵付け体験を実施したものの、観光客には琉球張子そのものの知名度が今ひとつでした。そこで、首里城の赤瓦が与那原町で製造されていることにちなみ、2年目からは与那原町商工会との協力体制のもと、漆喰シーサーを導入。これが大好評で、2012(平成24)年の辰年を機に首里城オリジナルのドラゴンを導入し、さらに今年には「もっと首里城らしいものを」とオリジナル龍柱を開発。ドラゴン、龍柱とも、財団スタッフと職人がアイデアを出し合って開発を進めたそうです。

もう一つの有料プログラムである旗頭のクラフトも今年で2年目。1年目は試作品キットも財団職員の手作りで、灯籠の部分は財団で使う大型プリンターロール紙の芯材をリユースしました。旗頭クラフトの実施日は、首里振興会を通して地元青年会に旗頭演舞をしてもらい、地元にも観光客にも好評。菅間主事はこう言います。



4

5

6

※沖縄では弥勒菩薩が琉球独自の来訪神信仰と結びつき、東の海から船に乗って来て豊穡をもたらすミルク神として信仰されている。

新垣 裕之 代表



首里城公園友の会・首里城研究会のメンバーで、西原町文化財保護審議委員でもあり、西原町史編纂に携わっていた新垣さん。経営する古書店は奥さまに任せ、最近では波の上宮史の編纂委員としても活動中です。首里城を復元する過程で、百浦添御殿（正殿）の設計をするために膨大な古文書を読み解く作業を分担されています。「琉球史の資料は、まだまだ読み込みはされていないと思う」と語る新垣さんに、なかなか表舞台には出てこないエピソードをお聞きしました。

「新垣さんが首里城復元に携わるようになったキッカケは何だったんですか？」
新垣 「あの頃、ちょうど百浦添御殿（正殿）を設計する段階で、国の業務を受託していた（株）国建が資料を集めていました。『誰か古文書を読める人がいないか？』と、草書体の一次資料を読める人を探し

ているとのことで、僕は県立博物館に出入りしていたので、その紹介で声がかかったんです」
「草書体で書かれた古文書！難易度が高そうですね。」
新垣 「そうですね、僕は國學院大学の史学科を卒業していますので、学生時代から日本の一般的な古文書は読めたんですよ。」

新垣さんは個人的にも貴重な資料を収集している。写真は、江戸立（江戸上り）の琉球使節団を描いた、江戸時代の版画。当時は日本中で「琉球ブーム」が起きた。



首里城関係で最初に読んだのは、『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法図』（以降、寸法記）です。日本の古文書との最大の違いは、琉球古語で書いていること。でも読んでみたら一週間かからなかった。『あ、読める』と手ごたえを感じました」
「それで文書の読み下しを担当されるようになったんですか？」
新垣 「琉球古語と日本語の古語で理解して読み進めないといけない。言葉の意味を読み解いていかないといけないのは、難しい仕事ではありました。当時、経営していた古書店が松尾にあったので、営業時間が終わったら国建へ直行して…という生活でしたね」

「首里城の復元を通して、それまではよくわかっていなかったことがわかったり、研究も相当進んだのではないかと思えます。実際、どのようなことがわかったのでしょうか？」
新垣 「そうですね、空間についてだけでなく、その空間の使い方などもわかってきたことも大きいと思います。寸法記から儀式のほうへと入って、絵図と合わせて見れば、どこでどのような動きがあったかがわかります」
「そういう意味でも、琉球古語の意味を理解することが重要になりますね。」

新垣 「そうですね。もう一つは、漢文の読み方というのもある。日本語で漢文を読解する時は、日本語で読み下します。琉球には久米村があつて中国系の方々がいましたから、漢文の読み書きも中国式が伝わっているんですよ。日本語で読むと、意味がわからないことがよくあります。中国式漢文を読解する時は、漢文の一つひとつを調べていく作業が必要です。一番いいのは、理屈ではなく、とにかく読み慣

れることですよ」
「一方で、首里城の復元に関しては近現代の資料もありませんね。」
新垣 「英語は得意ではありませんが、アメリカの公文書館まで調査に行きましたよ。沖縄戦で米軍が首里城にロケット弾を撃ち込んだという資料のコピーを取って来たりして。戦後、首里城

に琉球大学がつくられたのは、あの時代だからどうしようもないといえ残念なことです。僕が小学校2、3年生の頃までは、琉球放送のラジオ塔が木曳門のところにあつたぐらいですからね」
「首里には、沖縄戦で失われたものも、沖縄県民の手で復興したものもあります。今後の首里城に

関して、期待することは？」
新垣 「周囲にあつた寺院も含めて全体を整備すると、もっと変わってくると思いますよ。沖縄はいわゆる琉球処分後の旧慣温存政策で、本土にあつた廃仏毀釈運動がなかった。そのため寺院がそのままの形で残りまして。1899（明治32）年以降は円覚寺などは尚家の私寺になり

ます。ところが沖縄戦で失われましたね。もともと沖縄の寺院はすべて王家の寺で、一般の檀家はありませんでしたから、戦後、再建されることはなかった。歴史的・文化的にはこうした寺院も含めての首里城です。現実的に難しい問題はありますが、できるものなら復元をという気持ちがあります」



＜和名＞
ウバメガシ
＜科名＞
ブナ科
(学名: Quercus phillyraeoides Asa Gray)
Vol.25

今は道路が整備され道の駅もでき名護市の玄関口として多くの人々が利用している名護市許田ですが、海を背にして歩けばそこには貴重な自然が色濃く残っています。

名護市指定の史跡「許田の手水」を超えてさらに奥の森に進むと、うっそうと茂る木々の中にひととき目を引く大木が現れます。ウバメガシの大木です。ウバメガシは関東から沖縄にかけての沿岸部に生えるドングリの仲間で、沖縄では伊平屋島と伊是名島で多く見られます。許田は分布の南限に当たり、学術的に貴重な自生地です。ウバメガシの大木は高さ8m、胸高直径1mで、樹齢は270年と推定されています。幹の内部は腐朽により空洞化しており、長年にわたり厳しい環境で生き抜いてきた生命力を感じることができます。

許田集落ではこの大木のことを「ナーナシギー」と呼んでいます。由来は定かではありませんが、個体数が少なく、生活の中で利用されてこなかったため名無しの木とされたのかもしれませんが。傾斜のきつい不安定な斜面に生えるウバメガシの大木は幹が腐朽しているため倒伏が心配されています。そこで、ワイヤーを張り、人の手で支えを作ることにより守られています。

この大木は1973年（昭和48年）に「許田のウバメガシ」として名護市の天然記念物に指定され、地元の宝を後世に継ごうとする人たちの力で大切に守られています。

(佐藤裕之)

「鈴木孝二郎氏講演会」 「ユーフォニアムの奏」開催

2014年7月31日、沖縄美ら島財団の社会貢献事業として、沖縄県出身のユーフォニアムアーティスト鈴木孝二郎氏を招き、名護市民会館にて講演会を開催しました。同氏は、現在アメリカを拠点に世界各地で演奏活動をしており、学生時代には海洋博公園マーチング・バンドフェスティバルへも参加経験があります。

演奏と講演・実技指導の2部構成で行い、演奏の部では、ユーフォニアムとチェロ奏者鈴木ユリア氏とのデュオも披露され幅広い層の方に楽しんで頂きました。講演・実技指導では、高校卒業後単身渡米された体験談などを交えながら、参加した中学生・高校生に金管楽器の呼吸法や練習方法・演奏アドバイス等を行いました。

参加した生徒の中にはコンクールを控えている生徒もおり、良いタイミングでの実技指導になったようでした。



名護市民会館で行われた講演・実技指導の様子。

首里城公園友の会 「イヌマキ育樹祭」

首里城公園友の会では、沖縄県国頭村辺野喜ダム付近の県有林で『イヌマキ育樹祭』を年2回行っています。首里城復元を記念して、将来の正殿の修復に備えてイヌマキ(チャージ)を1993年に植樹を開始し、2002年度からは毎年育樹祭を行っています。イヌマキ育樹祭事業は、友の会の事業の中でもすつかり定着し、常連の参加会員も増えました。

平成26年度第1回目のイヌマキ育樹祭は、8月3日に86名の参加者で開催しました。首里城公園に集合し、小型バス3台を連ね、車中では琉球の歴史や文化について同乗講師の講話や首里城に関するDVD鑑賞も行い大好評でした。現場近くの公園で昼食をとり、パワー全開で作業を開始、暑い中の作業は大変ですが、会員の方々には快く作業を行って頂きました。

皆様の協力もあり、イヌマキはすくすくと成長し、参加した会員の方々の子や孫に夢を託して愛情を込めて育てて下さっています。手入れ後は、各自が担当したイヌマキに木札を掛けて次回までの成長を楽しみにします。

皆さん、「百聞は一見にしかず」ぜひイヌマキ育樹祭に参加してみてください。



作業の説明をする運営スタッフと参加者。



下草を刈り終え、清掃の様子。

国際誌に「タイマイの卵胞刺激ホルモン投与による排卵誘起」に関する論文が掲載

美ら島研究センターでは希少種であるウミガメ類の一種のタイマイにおける人工授精技術開発に取り組んでおります。今年Current Herpetologyという国際誌に「タイマイの卵胞刺激ホルモン投与による排卵誘起」に関する論文が掲載されました。

交尾排卵動物(交尾をしないと排卵しない動物)であるタイマイにおいて、人工授精をする際には、人工的に排卵を誘起する必要があります。そこで、排卵に関与すると考えられていた卵胞刺激ホルモンを雌タイマイに投与し、排卵を誘起することに成功しました。この結果は、ウミガメ類の排卵誘起に成功した世界で初めての事例となります。さらに、カメ類全体(陸ガメや淡水ガメ含む)においても新発見となったことから、繁殖に関わる海外の研究者から高い評価を得ており、カメ類の人工授精研究の進展に大きく貢献することが期待できます。



卵胞刺激ホルモンを雌タイマイに投与する様子。



排卵誘起前のエコー画像。

排卵誘起後のエコー画像。殻が形成されているのが確認できます。

今年もやります。 「春咲へひとつ飛び!」プロジェクト

沖縄美ら島財団では、平成25年度に続き「春咲へひとつ飛び!」プロジェクトを開始します。2年目となる今年度のテーマは「癒されたいなら、沖縄へ。もつと癒されたいなら、やんばるへ」です。

昨年度同様スカイネットアジア航空(ソラシドエア)との連携による機体ラッピングプロジェクト「やんばる花めぐり号」を就航させるほか、誘客重点都市を羽田・神戸・名古屋・台湾・香港・韓国の6エリアに拡大し、計5社の航空会社と連携したプロモーションを展開します。




また地域連携においては、北部市町村及び関係団体が一体となり効果的な広報宣伝及び誘客促進を図っていきます。受入各地域からの情報収集に努め、誘客重点都市でのプロモーションにも地域関係者と共に取り組み、やんばるの魅力の発掘及び情報発信を『オールやんばる』で取組みます。

新体制紹介

一般財団法人沖縄美ら島財団は、2014年6月18日付の理事会による役員の変更により、新たな経営体制となりました。

- | | |
|----|-------------------|
| 理事 | 花城 良廣 (はなしろ よしひろ) |
| | 町田 優 (まちだ まさる) |
| | 井口 義也 (いぐち よしや) |
| | 襲田 正徳 (おそだ まさのり) |
| | 松本 守 (まつもと まもる) |
| | 荒井 一利 (あらい かずとし) |
| | 川上 好久 (かわかみ よしひさ) |
| | 高良 文雄 (たから ふみお) |
| | 久高 将光 (くたか まさみつ) |
| | 与那覇恵子 (よなは けいこ) |

- | | |
|----|--------------------|
| 監事 | 譜久山當則 (ふくやま まさのり) |
| | 金城 棟啓 (きんじょう とうけい) |

 【理事長】 井口 義也 1977年3月、東京大学を卒業したのち、1977年4月、建設省(現国土交通省)に入庁。2008年10月、(財)海洋博覧会記念公園管理財団に入社。2014年6月、常務理事に就任。	 【常務理事】 町田 優 1980年3月、金沢大学法学科を卒業したのち、1981年4月、沖縄県庁に入庁。2013年4月、常務理事に就任。	 【理事長】 花城 良廣 1977年3月、千葉大学大学院を卒業したのち、同年4月、(財)海洋博覧会記念公園管理財団に入社。2009年4月、常務理事に就任。2014年6月、財団プロパーとして初の理事長に就任。
--	---	--

